

幼児に釈迦を

如何に語るべきか

笠原秀定

仏教童話の中には歴史的なものと、伝説的なものとがありましてその取扱いは仲々むづかしいのであります。

仏教童話も童話であるから、必ずしも歴史的に真実でなくても差支えないのであります。然し事実上は歴史的でなくとも、精神的には歴史的でなくてはならないのであります。云いかえてみますとその話が伝説にすぎなくとも、その伝説のもつ精神が、その時代なり又その主人公の精神なりを、正しく反映していなければならぬのであります。

その意味に於て釈尊の物語りを見ます時に、その中には多くの伝説もあるのであります。それは単に神話として生れたのではなくて、その時代なり、又釈迦の慈悲を説き、平等を説き平和を愛好し、解脱を説く教理の上から生れたものである事に気づくのであります。

釈迦の誕生について経典の伝うる処を見ますと、釈迦は約三

千年の昔に、印度のカピラエ国の浄飯王を父とし、摩耶夫人を母として、王子として出世されたのであります。経典によれば釈迦はこの世に生れる前にトソツ天にいられ、天上の榮華をきわめたのであります。摩耶夫人が満月の夜、高樓で眠っていた時、六牙の白象に托して、夫人の胎内に入る夢を見て懐胎されたと言はれているのであります。そして月満つるに當つて、摩耶夫人は、当時の印度の風習に従つて、長子を親里で産む為、天与城に向つて發足し、途中ルンビニーの花園に休息せられて、無憂華のさんくとした陽光に、咲き競つている一枝を、右手で手折らんとした時、玉の如き王子が右脇から降誕せられたのであります。それは四月八日でありました。王子は生れると七歩歩いて右手を上、左手を下にして、「天上天下唯我独尊」と獅子吼されたのであります。

その時空からは甘露の雨が降りそそぎ、産湯となつて体を洗い、あたりに香気たゞよい、花びらがひらひら舞うて、偉人の誕生を祝福したと伝えられて居ります。

釈迦が前世に於てトソツ天に生れ、時至りて身を六牙の白象に托して、摩耶夫人に托胎して、人間に生れたと云う事は、たゞ之を讀むと、太閤秀吉が、其の母日輪を呑むを夢見て生れたと云う様な、普通の神話的伝説と同じ様にきこえるのであります。之には大いに異つた内容のある事を知らなければならぬのであります。

元來釈迦在世時代に勢力をもつていたバラモン教徒は、天上に生れる事を理想として、その手段として、様々な苦行を行つたのであります。釈迦は種々の方便をもつてそれを打破したのであります。天上の榮華を折求するのは、人間の心が五欲の為に束縛せられているからで、今世に於て、如何に身を苦しめ、行を積んだところ

で、来世に於て依然として五欲の奴隸であるならば、それは本当の悟りの道ではないのであつて、人間として第一に努むべきことは、天上に生れる事ではなくて、地上に於て真人であることであり人類の目標は成仏と云うことであつて、仏とならんが為には、まず眞の人とならなければならぬと云うことから、釈迦が仏たらんが為に地上におり、摩耶夫人に托胎したと云う様によつて、バラモンの迷妄を打破しようとしたと説くところに、たゞの伝説と異つた深い意味があるのであります。

生れた赤子が七歩歩いて、手を上下にさして、*「我れは世界の最上者なり」*と叫び、産湯は天が感動した甘露の温き雨となつた事も釈迦出世の本懐の叫びを伝えたものであり、偉人の誕生を莊嚴されたものでありまして之を事実と信じた所で精神的には誤りではないのであります。

又幼児時代の話の中にもあります提婆によつて傷つけられた鳩を助けた話も、釈迦の慈悲が動物に迄及んで居る事を説いているのであります。兇悪きわまる提婆のために傷つけられた鳩が、釈迦の胸にとびこんで来たのを釈迦は之を保護し、怒つて来た提婆の要求を強くしりぞけ、傷の手当をして、空にはなしたと云う話であります。が之も史実であるかどうかは知らないが、精神的に見れば決して誤りではないのであります。釈迦の幼児時代の話として、いかにも自然的なふさわしい話で、之をそのまま話しても、決して伝伝の眞実をきづつけるものではないと思ふのであります。

以上は釈迦の伝記の一端を考察して見たのであります。が、釈迦の一生を伝伝によつて見ましてもそのすべてが歴史上からも自然で神

話的ものが殆んどなく、又多くの宗教創設者の少年時代は、貧窮偏質怪奇等が付きまとい、そこから出る妖気が、狂信的魅惑の要素となつて居るのであります。が、釈迦の生活は至極常態で、非常に明朗である事を感じるのであります。

そこで幼児に釈迦を如何に話せばよいかと云う事を考えて見たいと思ひますが、それには又幼児の童話は如何にあるべきかと云う事を先づ考えて見たいと思ひます。

幼児の心理は所謂軽信期でありまして、年長者から示された事について、何等の疑もなくそのまゝ、受容されるのであります。その経験する事柄を、殆んど総て眞と認め少しの疑惑をもたないものであります。又幼児は想像性に富んで居るので、幼児の話に於ては不合理的も許されるのであります。話全体を味うよりも、部分的の興味を持つものでありますから、部分的の興味のある、リズムカルな点や反復等に興味をもち、話の筋に多少の不合理があつても、気づかず聞き終るものであります。殊に幼児は彼等自身の熟知したものが現れた時に非常に喜びを感じるものであります。ですから話の中に出るものは幼児の知つて居るもので、日常親しみをもちつものがよく自分と同年輩の子供である事が望ましいのであります。

宗教童話として幼児に釈迦を語る場合に於ても、この特殊性を度外視して取扱うわけには行きませんので、幼児には矢張り釈迦の幼年時代を話す事が最も興味を持つ事となります。

昼御飯を終えたなら、三十分から一時間は横になる様に、子供に約束をしましょう。

入園後の一と月間の子供の状態、殊に疲労については返す返す注意をしていて欲しいと思います。一般的にいつてビタミンB₁の補給は効果があります。

最後にもう一言聞いて頂きたいのは、幼稚園の先生自身の健康の問題です。新入園児を迎え、それを幼稚園生活の中に溶け込ませるのは大変な努力です。あつちで泣き出した、こつちでもらした、こころではものをひつくり返した、と考えただけで目が廻りそうです。

しかも幼児期に於ける人格形成は非常に重大であり、その指導の任に当つているのが幼稚園の先生です。こうした責任を感じて、先生方は、ついつい無理をして体をいためることがしばしばあるのは、本当にお気の毒と思います。初めは気が張つているから左程に感じない疲労も、五月六月と子供たちが落ち付いて来たときに俄かにあらわれて参りますから、どうぞ日頃の健康に注意をなさることでそれには何といつてもよく睡ること。但しそれはだらだらと長くねるのではなく、深くねむる工夫であります。ブドー酒の一杯がきく方もあります。或はねる前の入浴とかマッサージのよい方もあります。兎に角工夫をして頂きたい。又、ビタミン類の補給は充分にして頂きたいと思ひますし、脂肪、蛋白質、などの割合も上手にとつて欲しいのです。

もし、少しでも具合の悪いことがあれば、直ちに健康診断をうけること。私共も御助力したいと願つています。

(27頁から)

仏教では釈迦の出生された、四月八日を花まつりと云つて、当日は花で飾つた花御堂の中に、手を上下にのぼした誕生仏をまつり、甘茶をかける行事をして居りますが、幼児には非常によろこばれるものであります。

釈迦が幼児の最も関心のある象の居る印度で出生された事、その時は丁度四月の花ざかりの春であつた事は、殊に興味深いものであると思ひます。そして王子として、順境の明るい生活をされ、すく／＼と成長された事は幼児ののび／＼とした生活と合致して喜ぶものであります。

仏教が悟りの宗教であり、釈迦の一生が誠に奮闘と云う事が少ないのでありますが、神話的の面も、教理的面から説かれて居る事を充分考へて、幼児に話す場合には充分生かすべき事だと思ひます。そして釈迦が大胆に現実をそのまゝに正視した事を忘れてはならないと思ひます。

お わ び

一月号、従野先生の「岡山県保育界の今昔」中の、三十三頁、最下段最終行「國富先生は九十余才の」とありますのは、「八十余歳」の誤植であります。

筆者、並びに読者に御迷惑をおかけした事を、深くお詫言いたします。